

# 新 知 故 温

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(10) 平成12年11月1日

駿河国地誌シリーズ(その1)

## 駿 河 記 (S220/16)

『駿河記』は文政3(1820)年に島田の桑原藤泰(黙齋)によって完成された地誌です。詳細な実地調査を繰り返し、丹念に考証して駿河全郡を記した地誌として位置づけられています。

18世紀後半から19世紀の江戸文化を化政文化とよびますが、このころ地誌編さんが全国各地で盛んになります。駿河にあっても時の駿府奉行服部久右衛門貞勝が『駿河大地誌』編さんを企て、文化9(1812)年の春、与力佐藤吉十郎をその係りとししました。集められた人物は山梨稻川(総裁)、峻嶽(総裁補佐)、河野通世(益津郡)、新庄道雄(安倍郡)、森宗芳(有度郡・庵原郡)、神田定保(富士郡)、贅川良以(駿東郡)、桑原藤泰(志太郡)らで、かつこ内のように役割や執筆分担も決まりました。

『駿河大地誌』編さんは大事業であり、行く手には様々な困難が待ち受けていました。編さんが開始されてまもなく、企画者の駿府奉行服部が松前奉行として転勤してしまったのです。残った者で気を取り直して各自実地調査にとりかかり、駿河7郡の内6郡は一通り調査を終えることができました。安倍郡は担当者の都合で調査はできませんでしたので、藤泰が調査することになりました。ところが、贅川、河野、神田、森らが、相次いで死去してしまったのです。各郡の調査執筆委員6人の内4人が死去してしまったのですから、残った者の編さん意欲は減退し、地誌編さんの続行は絶望的な状況でした。藤泰も大きな悲しみを味わいましたが、編さんには最後まで執念を燃やし続けたのでした。

藤泰は1人で黙々と編さん作業を続けました。既に一通り駿河7郡の調査を終えていても、正確な地誌とするためには何回も現地調査に出向く必要があります。現代とちがい不便なことはたくさんありました。中でもいちばんつらかったのは、調査活動の目的が村々に徹底しておらず、道楽のように見られることが多く、古文書などを見せてもらえないことがあったことでした。さらに調査のための費用はほとんど自前であったのです。このような苦労を重ねながらも文政元年、ついに原稿を書き終えることができました。藤泰はこの地誌を『駿河記』と名づけました。その後付録などを追加して同3年に39巻もの大作が完成したのです。完成にこぎつけるだけでも大変な費用がかかり、藤泰は苦心の大作を出版することなく66才の生涯を閉じてしまいました。

藤泰が亡くなってからちょうど百年たった昭和7(1932)年、この苦心の大作を目にした旧静岡県史編さん者足立鍬太郎と島田の実業家加藤弘造の尽力により、『駿河記』は300部印刷され、ここに日の目を見ることになったのです。

当館では藤泰当時の写本と言われる22冊(39巻)を所蔵しています。

### 【参考資料】

『駿河記 上・下巻』(S220/17 臨川書店)

『島田市史 中巻』(S223/24 島田市役所)

『東海展望』(SZ07/13 自治タイム社)